

## とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0827
施設名	松江おひさま保育園
施設所在地	江戸川区松江1-10-5
法人名	社会福祉法人えどがわ

### 1. 活動のテーマ

<テーマ>

感触遊びを楽しむ。

<テーマの設定理由>

子供たちの身近にある素材を使ってそれぞれの素材が持つ感触の特徴に触れたり、素材の違いを理解しながら繰り返し触うことを楽しむことを目指した。また、感触遊びを通じて素材に興味を持ったり、子ども同士で作品を見せ合ったり真似たりすることで、会話を楽しみコミュニケーションを計ることが出来るようにした。またボールプールでは、ボールを掴んだり投げること、大量のボールで跳んだり寝ころんだり、ボールに包まれて安心感を得るなど、様々な感覚を楽しんだりボールの色彩や他児との関わりが出来ることを目的とした。

### 2. 活動スケジュール

子供たちの中には、園庭にある砂や絵の具など、遊びや製作で使用している手に触れると汚れてしまうと感じ苦手な児もいた為、以下のように計画した。

11月：身近にある小麦粉に触れる。触れることが苦手な児は、粉が直接つかないことで安心して触ることが出来る風船やビニール袋などに入れて触った。小麦粉を保育士がこね、粉が次第に固まる様子や、ねばねばしている様子を見せ、興味がある児には実際に触れてねばねばベトベトの感覚を楽しむ。完成した粘土で伸ばしたりちぎったり丸めたりしてみる。

小麦粉粘土に食紅で色を付けて、様々な色の小麦粉粘土で感触とともに色の変化を楽しむ。

色を混ぜてコントラストを楽しんだり、自分の身近な果物や野菜や生き物を作る。

12月：小麦粉以外の素材で出来たスライムやかんてんなど違う素材で感触遊びを楽しむ。

ボールプールでボールを触ったり、身体全体を使ってボールプールの感触を楽しむ。

1月以降

小麦粉などを使った感触遊びでは、ローラーや型抜きなどの道具も使用して、道具の使い方を学んだり、道具を使いながら様々な形を作って完成する喜びや他児と見せ合うなどコミュニケーションを取る。ボールプールでは感覚を楽しんだり、不安定なボールプールでバランス感覚を養っていく、

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

保育室でタライなどで粘土になっていく素材の変化を見ることが出来るようにし、子どもたちに声掛けをしながら、少しずつ水を加えて粘土に変化していく様子を分かりやすく説明しながら行った。素材に触ることが苦手な児には、風船やビニール袋などの身近な素材の中に粉を入れて触れることが出来るように配慮した。出来上がった粘土(小麦粉、スライム、かんてん)は、グループ毎にローラー、カッター、ヘラなどを準備して、保育士が使い方を説明して、それぞれの道具を使用出来るようにした。アレルギーがない素材を選んだ。

### 4. 探究活動の実践

<活動の内容>

素材そのものに触れたり、素材が粘土に変化していく過程を見て、グループに別れて粘土を使用し、手先を使って丸めたり伸ばしたり、道具を使ってちぎったり伸ばしたりすることを楽しんだ。また素材に色を付けることで色の組み合わせを楽しんだり、色を混ぜることで色の変化を楽しんだ。ボールプールでは寝ころんだり座ってボールの感覚を楽しむと共に、ボールを掴んで投げたりボールが転がっていくことやボールの色の変化、他児とのボールの投げ合いなどボールを共有して楽しんだ。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

手形を取ったり絵の具や砂に触れるだけでも嫌がる児もいたが、最初に小麦粉粘土を作った時には、普段食べているうどんやパンなど食品が同じ素材で作られていることを伝えて興味を持たせ、子どもたちが真剣なまなざしで粘土に変化している様子を見ることが出来た。粉に触れることが出来ない児には、風船やビニール袋に入れることで感覚を楽しみ、素材に安心して触れることが出来るようにしたため、苦手に感じていた児も嫌がることなく触れることが出来た。身近にある色々な素材で作られた粉や粘土に触れることで、「冷たいね」「べたべたしてる」「つるつるしてる」などそれぞれの感触を楽しむ姿が見られた。また丸めたり切ったりすることに集中して活動したり、自分が作った作品を保育士や他児に見せたり、同じ形を模倣して作るなど刺激し合うことが出来た。道具を提供すると子ども達は道具に興味を持ち、保育士の使い方の説明もしっかりと聞くことができ、道具の貸し借りも「貸して」「いいよ」などの声掛けをすることができた。様々な作品が出来て、保育士が紹介すると、誰もが興味を持ち、「自分も作ってみたい!」「先生作って!」など意欲的に活動する姿を多く見る事が出来た。感触遊びが苦手だった児も他児との関わりを持つことで、「自分も作ってみたい」という意欲が湧いて、全員が粘土遊びに集中して楽しむことにつながった。グループもメンバーを入れ替えるなどして、色々なメンバーでコミュニケーションをはかることができ、普段関わりが少ない子ども同士で遊ぶことが出来た。ボールプールでは、ボールプールをみただけで子供たちは喜んで高揚した気持ちになり、誰もが喜んでボールプールに座ったり寝ころんだり、ボールに埋まったり全身を使って感触を楽しんだ。また、ボールプールという不安定な中でもバランスを取って歩こうとして体幹を鍛えたり、同じ色のボールを自分で集めたり、他児と違う色のボールを交換したり、他児とボールを投げ合ったりすることでの楽しみも生まれた。



### 5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

感触遊びは普段から活動で取り入れていたが、様々な素材を使用することで感触の違いや、色の違いなどを子どもたちが感じることができた。また、触れることが苦手な児がグループでの活動を通じて他児の楽しい様子を見ることで「やってみたい」「触ってみたい」気持ちが生まれ、素材触れて楽しむことができ、製作活動においても絵の具に触れることが出来たり違う場面でも苦手を克服することができるようになった。簡単な言葉で保育士や他児に感触の感想を伝えあったり、素材で作った形を見せ合ったり模倣したりすることでのコミュニケーションも沢山生まれ、子どもたちの主体的な活動や語彙が増えていくことにつながった。また手先を使って集中して没頭していることも良い経験となった。ボールプールでは普段消極的な児も意欲的に楽しむことが出来た。ボールプールという不安定な環境の中でバランスを取りながら座ったり立ったり跳んだり体幹を上手に使う姿が見られた。また、ボールの中に埋もれることで安心感を感じている児も多く、全身を使った五感を感じての活動は大いに刺激になった。